

旅立つには最高の日

田中真知

三省堂

Quand tu aimes il faut partir

愛しているなら旅立つんだ

ブレーズ・サンドラール「きみは空や海よりも美しい」より

チロはアメリカへ行った	6
ジュバの蜚	30
山上の聖地にて	40
靴を闇に放り投げる	52
水浴の午後	70
雨宿り	82
イチゴジュースをカイロで	93
砂漠の涸れ谷に眠る	108
レファットの告白	128
サバンナのざわめき、森の退屈	138
少年は笑わなかった	148
マダガスカルの長い一日	154
至福の山	166
光の庭	182
歩く人	208
あとがき	250
アフリカ東部地図	254
掲載写真解説・初出一覧	255



ジュバの蜚

初めてアフリカに足を踏み入れたのは、南スーダンが独立するずっと以前のことだ。一九八五年、ぼくは二十代半ばだった。ナイロビを経由して、内戦の小康状態にあったスーダン南部の都市ジュバへ飛んだ。

乾季の猛暑のさなかだった。田舎の駅舎のような空港の滑走路に降り立つと、暑熱のせいか足元のアスファルトがふかふかとたわんだ。当時のジュバは南部の中心地とはいっても、高い建物もなければ、クルマも少なかった。でこぼこの道の両側にトタン屋根をのせた簡素な建物が並んでいる。道端の草むらには、くしゃくしゃになった紙やひからびた人糞が散乱している。そのためか、どこを歩いても、甘くすえたような腐敗臭が漂っていた。町には手ごろなホテルはなかったが、教会が提供している部屋に泊めてもらうことがで

きた。中庭に面してコンクリート製の部屋が並び、それぞれの部屋の前面は扉も含めてすべて金網になっていて、鳥小屋のようだった。

到着した翌日の夕方、散歩から戻って洗面所でシャツを洗っていた。すると突然、頭がぐらぐらして平衡感覚が失われ、床に倒れ落ちそうになった。つづいて激しい頭痛がはじまり、吐き気がこみあげてきた。手先は痙攣している。

なんだこれは。マラリアだろうか、それとも熱帯の風土病だろうか。不安であれこれ考えていると、ますます痛みが強くなってくる。大量の水と鎮痛薬を飲んで、ベッドに横たわる。目を閉じると痛みの収縮にあわせて、まぶたの裏に無数の白い光が明滅する。

知らぬ間に眠ってしまい、気がついたら真っ暗だった。漆黒の闇を無数の鈴をふり鳴らすような虫の音が満たしている。トイレに行こうと懐中電灯をつけた。すると一瞬、光に浮かびあがった床面が、ずれたように見えた。めまいのせいではなかった。床にいたおびただしいゴキブリがいつせいに動きだしたのだった。

「それは日射病だろうね」と、翌日会った人類学者の栗本英世さんがいった。「アフリカの洗礼だね。いまはいちばん暑い時期だからね」

栗本さんは当時、ジュバから二百二十キロほど離れたラフォンという村でフィールド調

査をしていた。その栗本さんのフィールドを訪れるために、ここまでやってきたのだった。幸い、日射病は軽くすんだので、数日後、栗本さんの調査地へ同行させてもらった。

サバンナの真ん中に島のように隆起する巨大な岩山、その裾野をかこむように少数民族パリ人の六つの集落が広がっている。ちょうど一年で最大の儀礼である新年の祭りがはじまる時期だった。胸がわくわくした。初めてのアフリカということもあり、過酷な自然の中で暮らす人びとへのロマンチックな思い入れもあった。

当時はまだ、人類学者というと、現地の村に住みこんで、ノート片手に村人の語る民話を集めたり、儀礼を観察したりといったようなことをしているのではないか、という印象があった。たしかに、そういうこともするのだけれど、そうした素朴で、幸福な調査をつづけるには、栗本さんのフィールドはやっぱりいい問題を抱えすぎている。

当時、アフリカ最大の面積の国だったスーダンでは、北部のイスラム系の政府と、自治を求める南部の反政府武装組織 SPLA（スーダン人民解放軍）との内戦がつづいていた。イスラム化を進める北部政府に南部の人びとは反発し、ラフォンも例外ではなかった。

ぼくが訪れた年の一月にも、SPLAの大部隊が村に進駐して、数百人の若者がSPLAに参加するために自発的に村を出ていったという。部隊が村を去ったあと、混乱した村人らによる激しい略奪が行われ、栗本さんの小屋も破壊された。生命にかかわる何重もの

脅威、一触即発の緊張状態の中で、この人びとは暮らしているのだった。

そんな中、五日にわたる祭りがはじまった。精霊が棲むという岩山のふもとでの長老たちの演説と会議につづいて、若者たちは槍をかかげて炎天下のサバンナに飛びだし、大地を踏み鳴らし、雄叫びをあげながら、えんえんと走りまわる。喉が渴けばこの日のために仕込んでおいた雑穀のビールをあおる。広場で行われる踊りのときには、頭に鳥の羽や花をさし、サングラスや腕時計、ミニスカート、ハイソックス、スニーカーなどありったけの品々を身につけて、自分を飾りたてる。興奮が極まるとつくみあいになったり、刃物による流血沙汰も起きたりした。

それぞれの村人たちがどんな思いで今年の祭りにのぞんでいるのか、もちろんわからなかった。それでもなにより印象的だったのは、祭りの間にいくたびとなく目にした彼らの笑いだった。愛想笑いでも、嘲笑でも、冷笑でも、失笑でもない。全身が笑いそのものと化すような、そんな笑いだった。それはいまこの瞬間、内から純粹にこみあげてくる生きる喜びのように思われた。その笑いに包まれれば、どんなことでも許せそうな気がした。ああ、笑いとはこういうものだったのか、と思いださせてくれる笑いだった。

祭りの初日は、彼らといっしょにサバンナを走りまわり、踊ったり、ビールをあおったりした。けれども、二日目にはもう彼らの疲れを知らないパワーについていけないかった。

そのまぶしいほどの熱狂を目のあたりにしていると、どういうわけか気持ちがみじめにふさぎこんでいった。人は自分の想像力のスケールで測れないものに直面すると、どうしたらいいかわからなくなるのかもしれない。

けれども、そんなほくに村人はやさしかった。栗本さんの知り合いということでも、どこでも歓待された。年配の女性は現地名をつけてくれた。たびたび食事にも呼ばれた。でも、口がきけず下を向いていた。村人は「怖いことがあるのか」とか「日本のことを思いだしているのか」とか心配してくれた。自分でもわからない。主食のクオン（モロコシの粉を湯で練ったもの）が熱いのではないかと気をまわした若者がスプーン代わりに貝殻を渡してくれた。その心遣いにまた落ちこんだ。

祭りが終わり、ジュバへの帰途につくランドローバーに乗りこんだときには、ふぬけのようになっていた。ジュバでは栗本さんが寄宿していたオランダ人研究者の家に泊めてもらい、翌日、着ていたシャツやパンツを出入りの若者に洗濯してもらった。

ところが、戻ってきた洗濯物の中に渡したはずのパンツが一枚ない。若者は「知らない」という。栗本さんに相談すると、「たぶん彼が盗んだんだろうけど、出てこないだろうね」とあっさりいう。

目の前が真っ暗になった。スーパーで四枚千円だから買ったパンツだ。四枚のパンツで一年旅する計画だった。その計画がいきなり崩れてしまった。三枚のパンツでこれから一年旅するなんて、とても無理だ。どうして、そんなに絶望的な気分になったのか、いまとなっては想像しにくい。そのくらい精神的に追いつめられていたのだろうか。

市場に行ってみたが、あるのはひもで結ぶデカパンばかりで、日本で売っているようなパンツはもろくない。こんなんじゃない、こんなものを履いて旅するなんて考えられない。ますます暗澹たる気分になって、そうだ、日本の友人に頼んでパンツを送ってもらおう、いやこうなったら、いったん帰国して四枚千円のパンツを二組買って出直そうなどと明らかに荒唐無稽な妄想にとりつかれた。

市場には象皮病なのか何倍にもふくれあがった足を投げだして木陰にすわりこんでいる男がいた。不自然に曲がった足を杖で支えながら器用に歩いていく人もいた。自分はないをやっているんだろう。行き場を失った思考がぐるぐると同じところをめぐる、感情がジェットコースターのように上がったたり下がったりした。

追い打ちをかけるように、その日の深夜、またも激しい頭痛と火照りで目が覚めた。溶けてどろどろになった鉄がからだの中のたうちまわっている。その熱い塊が、脈にあわせて脳天を突きあげ、そのたびにまぶたの裏に白い光が散る。座薬も効かず、明け方まで

水浴の午後

旅先で出会った人と帰国後に連絡をとることなどめったにないのだけれど、あなたに連絡をとってみようと思ったのは、別れぎわにした約束を、ひょっとしてまだ覚えてくれているのではないかという、かすかな期待があったからかもしれない。とはいっても、ナプキンの切れ端に書いてくれた連絡先に宛てて葉書を書いたのは、あれから、まる二年もたってからのことだった。

おひさしぶりです、どうしていますか……。近況をたずねるだけの変哲のない文面を書きながら、絵筆を持つあなたの手許を思いだしていた。ゆったりとした腕の動きと手首のしなやかなひねりが、筆先の運びと一体となって、白い紙の上に水の流れるような細い筋を何本もひいてゆく。その舞うような動きにあわせて、重なりあう筋の流れの中から、植

物の茎や葉のかたちが浮かびあがってくるさまは、見ているだけで酩酊にも似た不思議な昂揚感を覚えたものだ。

けれども、はなはだ失礼な話だが、顔となると、ほんやりとしか浮かんでこない。白いTシャツに包まれた背中や、華奢な肩の上に乗った細いうなじや、蛙のピアスをつけた耳などは、あの雨季のはじめのしっとりとした重たい大気の匂いとともに、いまでも生々しく思いだされるのに。

おそらくそれは、絵を描いている姿を、いつも背後から見ているからかもしれない。あなたのお気に入りの場所は宿と外の通りを結ぶ水路沿いの道端だった。用水路の向こうには田んぼが広がり、のびはじめた稲が風が吹くたびに波のようにきらめいていた。あなたは小さな椅子に腰かけ、背中を少し丸めて畦道に生える草花を熱心に写しとっていた。

外に出かけるたびに、後ろを通ったから、挨拶がてら声をかけていたのだけれど、はじめは、返事もしなかったし、ふりむきさえしなかった。あなたの片方の耳が聞こえないことを知るまでは、無愛想なやつだと思っていた。

それでも、ふとのぞきこんだ絵に惹かれたのは事実だ。一見、写実的なのだけれど、どこか目の前の植物と印象がちがう。かといって、地元の絵師が好むような極端に様式化された画風でもない。目をひいたのは、画題に選んでいたのが、チュンパカのような美しく

見栄えのする花ではなく、虫に食われた実とか、竹の根とか、腐りかけた花といったものだったことだ。それははじめ、この土地の絵の題材にふさわしからぬものに見えた。だが、盛んな生命力のあるところには、盛んな死がある。生命の循環は、絶えざる死によって支えられている。絵を見ながら、そんなことを思った。

——植物が好きなんですか？

——なにかの折、その声をかけたとき、めずらしく、こちらをふりむいた。

——そうね、とくに好きってわけじゃないんだけど、最近植物ばかりかな。

——前はちがうものを描いてたんですか？

——うん、風景とか人の顔とかね。でも、そういうもの描いていると他人が寄ってくるのね。話しかけられても、わたし耳が悪いからよく聞こえないし、わずらわしかったし。

——それで植物を？

——植物って無難なのよ。描いているのが草や花だとわかると、とたんに興味をなくしちゃう。寄ってきてても、すぐ飽きてどこかに行っちゃう。

こんな話を聞いた以上、当然ぼくもすぐどこかへ行っちゃうべきだったのかもしれない。しかし、同じ宿で、しかも泊まり客が自分たち二人だけだったから、口をきかないと気まづくもあった。挨拶をくりかえすうちに、植物を描くのには無難だからという以外の理由

もあるらしいことがわかってきた。

——植物には流れがあるの。固定されたかたちではなくて、うねったり、ねじれたりしながら、広がろうとする生命の流れ。最初はひたすら植物のかたちだけを丹念に写していたんだけど、そのうちに自分が惹かれているのは、かたちじゃなくて、この生き生きとした流れのほうなんだって気づいた。

——流れ？

——そう。種から芽が出て、そこから茎や葉が流れだし、つぼみから花が流れだし、香りや蜜が流れだす。その流れに惹かれてやってきた虫や鳥が植物の命をむさぼると、こゝろは植物の命が虫や鳥となってさらに流れていく。植物を描くのは、絵筆を通してその流れとひとつになりたいと思うからかもしれない——。

ときおり断片的な会話をするようになったものの、あなたとの間にはいつも遠い隔たりが横たわっているように感じていた。そこにいないというか、なにかを話しているも上の空なことが多く、こちらの発した言葉が行き場を失って立ち消えてしまうように感じられ、心もとなかった。

日の暮れかけるころ、よく用水路の前に置かれた縁台の上で、瞑想でもしているのか、上体をのぼして、あぐらをかいてすわっていた。そんなときのほうが、話しているときよ

り、あなたがそこにいるように感じられた。あなたは言葉の中にはいない人だった。どんな旅をしているのかも知らずじまだったし、名前すら聞かなかった。でも、旅の出会いほたいいというものだ。ここをあとにしたら、あなたについてのささやかな記憶もすぐに色あせて思いだすこともなくなるだろう。そう思っていた。

だから、ある日、ふいに、あした行くところがあるのだけれど、よかったら、いっしょに行かない、と声をかけられたときには驚いた。

——どこへ行くんですか。

——わたしの先生のところ。

——絵の先生？

——そういうわけじゃないけど、そうともいえるかも。

あなたは無表情にいった。

翌朝早く、村の停留所からバスに乗った。あなたはすぐに目を閉じて寝てしまったので、道中ほとんどしゃべらなかつた。途中二回ほどバスを乗り換え、四時間ほど行った小さな村の入口で降りた。

——ここですか？

あなたは返事もせずにお供え物らしき包みや紙ばさみを抱えて先に歩いていく。その背

中を見ながら、あとについていった。小さな集落を抜け、遠くに緑の山並みをのぞみながら、木々に覆われたなだらかな裾野を登り、そこから平坦な山道をしばらく行くと視界がひらけ、草に覆われた場所に出た。

真昼の光を浴びた草原の中を道はなだらかに下っていった。やがて涼しげなせせらぎの音が聞こえてきた。花が咲き、鳥が鳴き交わしている。こぢんまりとした柵田もあり、心地よい風が吹きすぎてゆく。

ふいに谷間の窪地に幾何学図形のように整地された広場が現れた。広場の前には大きな草葺き屋根の建物が立っていたが、なにより目をひいたのは、広場の中心にそそり立つ高さ三メートルもあろうかという真っ白な巨大なリング（男根像）だった。こんなところに寺院があるとは。しかし、この島の伝統的な寺院ではふつうリングは祀られない。どういう寺院なのだろう。

リングは無数の花々や果物や色鮮やかな砂糖菓子などにとりまかれていた。あなたもリングに近づくと、持参したお供えの品をそこに並べた。

建物の中から腰に布を巻いた男性が現れた。にこやかな笑みを浮かべ、片腕に小さな子どもを抱えている。あなたは駆けよって、その前にひざまずいた。男性は子どもを抱いたまま、なにやら唱えている。あなたは頭を垂れて合掌している。それが終わると、持って

至福の山

だれもが多かれ少なかれそうであるように、この地上のどこかに、自分にとって理想郷といえるような場所があるのではないか、と若いころは漠然と思っていた。それがどんなところなのか、具体的に想像したわけではないけれど、スーダン西部のダルフル地方のジェベル・マッラ（マッラ山）にたどりついたとき、ああ、それはこのような場所なのかもしれないと思った。

ジェベル・マッラのことは、これまでなんどか書いてきたけれど、訪れてから三十年以上たつというのに、その記憶はほかの旅の記憶とは別の場所に保存されているかのように、なにかのきっかけで鮮烈によみがえってくる。

ジェベル・マッラという地名は、持っていた英文ガイドブックにも載っていた。だが、

そこに行こうと決めたきっかけは、首都ハルツームから白ナイルの対岸に渡った砂漠で出会った遊牧民の言葉だった。ジェベル・マッラという名を口にするとき、遊牧民のリーダーの険しい表情は目に見えてゆるんだ。一年じゅう涼しく、水もたっぷりあり、オレンジやグアバ、マンゴーなどの果物がたわわに実る、それはそれはすばらしいところだ。あたかも地上の楽園について話すかのような口ぶりだった。

ハルツームから列車に乗り、五日かけて西の外れの終点ニヤラまで行った。そこでジェベル・マッラに行きたいというと、このトラックに乗れといわれ、目的地に着くと、またその人にこのトラックに乗れといわれ、いわれるままにトラックを乗り継ぎ、山裾の小さな村にたどりついた。

「ハワジャが来た！」と子どもたちが騒ぐ。ハワジャとは「外国人」という意味だ。村人たちに、どこへ行くのかと聞かれる。「ジェベル・マッラ」というと、「デリバのことか」といわれる。デリバ？ なんのことだかわからないが、とりあえずデリバというところをめざすことにする。

ここからは山道だというので、荷を運ぶためにロバを買う。だが、このロバがまるでいうことをきかない。荷物を運ぶどころか、頑として動こうとしない。途方に暮れる。ところが、そばにいた子どもが手綱をとると、ロバは嘘のように従順に歩きます。しかたなく、

その子どもにも道案内を頼んで、山に入る。

二日目の昼下がり、山間の小さな集落にたどりついた。空っぽのあずまやの並ぶ広場があり、幹の曲がりくねった木々が濃い影を落としている。一軒のあずまやの下でミシンを踏んでいる村人がいた。目が合うと、ふっくらとした浅黒い丸顔に花が咲いたように満面の笑みが広がった。その瞬間、ああ、ここだ、と思った。

案内の子どもにも、ここでいい、といってロバから荷物を下ろしていると、広場の向こうの丘の上から水の入ったポリタンクを抱えた金髪の白人男性が現れた。

「いま着いたのかい」と男性がにこやかな笑みを浮かべていった。

「うん、たったいまね」

男性は旅行者だった。名前はミック。あとから黒髪のがールフレンドも現れた。二人は、この村に二か月近く滞在しているという。

「二か月もここでなにをやっていたの」と聞くと、ミックは「うーん」と口ごもった。横から黒髪のリンダが「とても大切なことよ」という。

「大切なこと？」

「ごはんつくったり、食べたり、洗濯したり、お茶飲んだり、水を浴びたり、友だちとおしゃべりしたり、そういうこと」

ミックとリンダは広場に面した草葺きの円錐屋根の小さな家に暮らしていた。中にはムシロが敷かれ、ネズミよけのためか天井に張ったロープに食料がぶらさがっている。石を並べた小さなかまどもある。

ミックは、手書きのジェベル・マツラの地図を見せてくれた。ポールペンで色分けされた三枚組みの詳細な地図だ。それを見てジェベル・マツラが巨大なカルデラを中心として、その周辺に広がる山岳地帯であることを初めて理解した。そのカルデラの名がデリバだった。カルデラの内部には大小二つの湖がある。

「この地図、自分でつくったの」

「うん、足で歩きまわってね」

「すごいなあ」

「ぼくたちがいる村はここだ」ミックが地図を指さす。カルデラの北西だ。

「目の前のこの広場に週に一度市が立つ。明日がその日なんだ」

ミックはここでの暮らしを愛おしそうに語る。

「ここはほんとうにいいところだよ。人はみな感じがよくなって、やさしい。あそこにいるイブラヒムにもほんとうによくしてもらった」

ミックはあずまやでミシンを踏んでいるふっくらした男性を見る。ああ、彼はイブラヒ

ームというのか。

「この小屋もイブラヒムが貸してくれたんだ」

「へえ」

「でも、ビザの期限があるので、あさって山を下りる。ぼくたちにとって明日が最後の市になる」

ミックに地図をノートに写させてくれないかなと頼んだ。もちろん、とミックはいった。「ねえ、ミック」とぼくはいった。「きみたちが出発したあと、この家に住めるかな」

「大丈夫だと思う。イブラヒムに頼んでみよう」

さっそくミシンを踏むイブラヒムのところへいっしょに行ってミックが話をした。イブラヒムはニコニコしながら大きくうなずいた。

ミックとリンダは、広場で小さな茶屋をいとなむイザークとムハンマドも紹介してくれた。湧き水の場所、水浴びや洗濯をするための溪流、用便のための木陰、ロバをつなぐのに適した草地などにも案内してくれた。

途中で出会った人たちと長い挨拶を交わし、お茶もごちそうになって、広場に戻ると、小屋の前で男が待っていた。つりあがった細い目に、がまぐちのような大きな口をしている。男はこちらに気づくと英語で、おい、ミック、おまえたちは村を出るそうだがイブラ

ヒームに借家代は払ったのか、という。ミックは、なんであなたがそんなこと聞くんだ。イブラヒムにはぼくからお礼する。あんたには関係ない、といった。男は、イブラヒムは英語ができないから、オレが代わりにやってやっているんだ、という。

二人はしばらく言い争っていた。リンダが仲裁に入り、男は去っていった。

「あいつはアブバクル」とミックがいった。「さっき、この村の人はいい人たちばかりだといったけど、あいつには注意したほうがいい」

「なんとなくわかる」

「悪党というわけじゃないんだけど、金にうるさくて、なにかとしゃしゃりできては、いちゃもんつけるんだ。問題は、ここで英語ができるのがあいつだけだったことだ」

翌日、広場は昨日とは別世界だった。空っぽだったあずまやは近隣の村からやってきたおおぜいの商人と、山盛りの乾燥オクラやトマト、コメやナツメヤシ、岩塩、唐辛子、種々の香辛料、落花生、さらに衣服や雑貨などで埋まった。その中を色鮮やかな布をまとった女たちが籠や器を持って闊歩していく。広場の外ではウシが屠られ、それは一時間ほどで手際よく解体され、部位ごとに木の台の上に並べられた。村の家々では、この日のために仕込まれた雑穀のビール「ポコ」がふるまわれる。ミックとリンダと市をまわり、な

あとがき

本書は『たまたまザイル、またコンゴ』（偕成社）以来の、わたしの旅についての著作である。書き下ろしの「チロはアメリカへ行った」と「光の庭」のほかは、おもに『旅行人』誌に書いたエッセイをもとにしているが、大幅に加筆・再構成し、プライバシーの点から詳細をぼかしたものである。自分の中では『孤独な鳥はやさしくうたう』（旅行人）につながるエッセイ集である。

旅は出会いであるといわれる。だが、出会ったものとはかならず別れなくてはならない。この本では、どちらかというと、旅を通じたさまざまな別れをあつかったものが多くなった。

別れたものは、いきなりいなくなるわけではない。死者が自分の中で生きつづけ、気がつけば対話の相手となっていることがあるように、旅で別れた人や風景や物語もまた、自分の内面に居場所を定め、折にふれてよみがえってくる。

出会ったときには気にも留めなかった出来事、日記にも記されず、写真に撮られることもなかった断片的な映像や会話が、時の経過の中であぶりだしのように浮かんでくる。旅の経験は、そうや

って熟成と変容をつづけ、いつしか空気や水や光や温度のように自分に寄りそう存在となり、不在を意識すらしなくなっていく。それが別れの成就ということかもしれない。

収録作品のいくつかについて簡単にコメントしておく。

「チロはアメリカへ行った」は、日常と「ちがう世界」に身を置いたときの不安と孤独と充実感の入りまじった旅の原体験として、ここに収めた。

「ジュバの蜚」は初めてアフリカを訪れたときの「旅の前夜」の話。この訪問から八年後の一九九三年二月、ラフォンの六つの集落はSPLAの内紛による抗争で全焼した。以来、栗本英世さんは「故郷から切り離されお互いに連絡するすべをもたない人びとのあいだで、共通の知りあいの安否や消息を伝える連絡係のような役割を担うことになった」と著書『民族紛争を生きる人びと』（世界思想社）で書いている。その後、栗本さんは大阪大学の教授・副学長になられた。

「山上の聖地にて」に出てくるジャーナリストの沼沢均さんとは、彼が共同通信ナイロビ支局長だったときに知りあった。ナイロビに立ち寄るたびに、ビールを飲みながら、いろんな話をした。最後に会ったのは彼が南アフリカの取材から帰ってきたときで、ステイブ・ピコのお母さんに会った話をうれしそうにしてくれた。彼の計報を聞いたのはその年の暮れだった。

「砂漠の涸れ谷に眠る」はエジプトの砂漠で修行生活をするコプト正教の修道士たちのもとを訪れた話。『ある夜、ピラミッドで』（旅行人）に収めた「隠者たちの沙漠で」の続編にあたる。

「至福の山」は、自分にとってコンゴ河の旅とともに、もっとも印象深かった旅であるスーダン、ダルフル地方のジェベル・マッラでの日々。『アフリカ旅物語 北東部編』（凱風社）にも書いた話だが、これまで記していなかったことなどもふくめた。

「光の庭」は母をめぐる話。身内のことを書くのには迷いや葛藤もあったが、『孤独な鳥はやさしくうたう』に収めた「父はポルトガルへ行った」につながる話として書いた。

「歩く人」はカイロで出会った水津英夫さんへの数回にわたるインタビューがもとになっている。少しだけ切らせてもらった水津さんの髪は、早川千晶さんがケニアに持っていく、彼女が「この世でいちばん好きな場所」だという丘の上から、風にのせてアフリカのサバンナに飛ばしてくれた。また、本文にも登場する棋士の森信雄さん（二〇一七年に引退）は水津さんの写真を整理し、一部を「旅の仙人写真館」というブログで公開された。

旅をめぐる環境は、二十一世紀になって大きく変化した。ネットにさえつながれば、どこにいても世界中の情報にアクセスできる。一方で、行き過ぎたグローバル化によって、暴力や環境破壊までもが地球規模で広がった。そこに起きた新型コロナウイルス感染症の世界的拡大によって、いまや人間の自由な移動にはリスクがともなうと考えられるようになった。

だが、コロナ禍のせいで従来のルーティンから離れた生活を余儀なくされたことによって見えてきたこともある。あたりまえだと思っていた日常も、いつ断ち切られるかわからないこと。しなく

てはならないと思いきんでいたものの多くは、じつはしなくてもなんとかなること。際限のない情報を追うよりも、自分がほんとうにしたいことを見直すほうが正しいこと。

じつは、それこそまさに旅の感覚である。旅の中にあるとき、たいてい意識せずに行っていることがある。荷物は必要なだけしか持たない。あるものでなんとかする。目的地へ着くことより過程を味わう。人との偶然の出会いを楽しみ、別れを潔く受け入れる。有限の時間と予算と体力の中で、ほんとうに行きたいところへ行き、見たいものを見て、会いたい人に会う。そんな旅のまなざしで日々と向きあうとき、日常はそのまま旅となり、今日は旅立ちの日となる。

本書の制作にあたっては、三人の共同制作者の方々に言い尽くせぬほどお世話になった。不屈の熱意と粘り強さで企画を通してくださった三省堂の樋口真理さん、緻密な校閲と校正と提案、ならびに全体の構成をくださった編集の藤本なほ子さん、そして春のような笑顔で、クールなデザインをしてくださったデザイナーの納谷衣美さん。なかなか原稿を書かないわたしを、コンゴ河の船を待つように辛抱強く待ちつづけ、励ましつづけてくださったすてきな方たちに心からの感謝を捧げたい。